

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方におかれましては、令和4年という輝かしい年をご家族揃ってご壮健にてお迎えになられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、それぞれの職務において町政進展、また住民福祉増進の上にお力添えをいただきありがとうございました。皆様のお陰で、三芳町は着実に前進した1年でした。

一方で、一昨年から感染拡大していた新型コロナウイルスが、秋口から収束の兆しを見せていましたが、オミクロン株が世界で急激に感染拡大しており、日本においても感染者数がここに来て増加傾向にあり、予断を許さない状況です。

職員の皆様には、引き続き感染症対策にご協力いただきますようお願いいたします。

新型コロナウイルスの感染拡大から2年になりますが、この間、私たちは、孤独と不安と閉塞感の中でコロナと戦いながらも、健康のありがたさ、人と人との絆の大切さを強く感じ、学びました。また、それが、まちづくりの原点でもあると再認識した1年間でもありました。

そうした中で、多くの事業が、中止、延期となりましたが、コロナ禍であっても、顕著な成果をあげていただいた2課を、本日、表彰させていただきます。

まず、健康増進課。新型コロナウイルス感染症拡大の中で、迅速なワクチン接種を行い、近隣自治体より高い接種率で感染症対策に尽力いただきました。

次に、MIYOSHI オリンピアド推進課。新型コロナウイルス感染拡大によって1年間延期となった東京オリンピック・パラリンピック。オランダ、マレーシアとのホストタウンとして、その責務を果たし、事前キャンプ、聖火リレー

などオリパラのレガシーを遺してくれました。

また、勤続 30 年を迎えられる職員の皆さんにも、長い間、三芳町発展のために精励いただきました。

皆さんに心から感謝申し上げます。

さて、今日は、オリパラのレガシーと「ふるさと地球」についてお話をさせていただきます。

昨年を振り返ると、コロナに始まりコロナで終わった 1 年でしたが、やはり、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの年と言っても過言ではありません。新型コロナウイルスの感染拡大で 1 年延期となり、さらには緊急事態宣言下で、しかも無観客開催というオリンピック史上前例のない大会となりました。

三芳町は、オリンピックでオランダ女子柔道チームのホストタウン、パラリンピックでマレーシアの共生社会ホストタウンでした。

果たして、緊急事態宣言下で事前キャンプは可能なのか、聖火リレーはできるのか大変懸念していました。

昨年、年末の 12 月 25 日にホストタウン・メモリーズ・コンサートが、コピスみよしで開催されました。これまでのホストタウンとしての取り組みを映像と音楽で振り返る企画でした。たいへん感動しました。

東京オリンピックの開催が決定してから、町では、政策研究所でホストタウンについて調査研究し、2017 年から淑徳大学、オランダ柔道連盟と調整を進め、本大会まで 4 回の事前キャンプを受け入れてきました。

コロナ禍ではあっても、多くのボランティアの皆さんの参加によって支えられた聖火リレー、オランダ女子柔道チームの事前キャンプとバスの中からの小中学生との交流。サンネ選手の銅メダル。マレーシアの事前キャンプはかない

ませんでした。マレーシアパラリンピック委員会メガット会長にお越し頂き、マレーシアの選手団も多くのメダルを獲得しました。

ホストタウン・メモリーズ・コンサートで、これまでの取り組みを振り返り、あらためて多くの皆さんの協力によりホストタウンとしての使命を無事に果たすことができたこと、そして、かかわった皆さんの心の中に、なにがしかのレガシーを遺すことができたのではないかと確信をしました。関係者の皆さんに感謝の気持ちで一杯です。

皆さんにとってのオリンピック、パラリンピックのレガシーは何だったのでしょうか。東京オリンピック・パラリンピックにかかわった、あるいは2021年の東京開催を体験した日本人として、一人ひとりのレガシーは異なると思います。

私にとってのレガシーは、広報みよし9月号で、少し紹介させていただきましたが「together」（共に、一緒に）です。

オランダ女子柔道チームが試合を終えて帰国する時に、空港まで見送りにいきました。銅メダルを獲得したサンネ選手はじめコーチ、選手団に、祝福と感謝の言葉を述べるためでした。

サンネ選手は、私たちに銅メダルをバッグから取り出し、満面の笑みで手にとって見せてくれました。そして、ご自身がお土産に購入されたのだと思いますが、5色のリストバンドをプレゼントしてくれました。

そこには「Together」と書かれており、「Together」という言葉を指さし、「皆さんのお陰で共に戦い、銅メダルを獲得できた」「ありがとう」と語りかけてくれました。

オリンピックのモットーに「Faster・Higher・Stronger」（「より速く、より高く、より強く」）があります。これは、1894年、「近代オリンピックの父」と呼ばれるフランスのピエール・ド・クーベルタン男爵が提案したもので、「より高いパフォーマンスを通して、人間の完成に向けて永久に励む（努力する）こと」を意味しています。

国際オリンピック委員会（IOC）は、制定から約130年近くたった今回の東京オリンピックから、新たに「Together」という言葉を加えました。そこには、新型コロナウイルス感染が拡大する世界において、世界中の人々がスポーツを通して世界がさらに連帯することへの思いが込められています。サンネ選手が示した「Together」は、昨年の東京大会から加わったモットーでした。

サンネ選手の活躍をオランダでは、どのように紹介しているのか気になり、オランダ在住のオリパラのアドバイザーに訊ねてみました。

オランダからのメールに驚きました。新聞各紙で取り上げられ、テレビ番組等にも出演しているとのことでした。アドバイザーから、新聞3紙の原文記事と要約した内容が以下のように送られてきました。

『柔道家サンネ ファン ダイクは亡くなった兄に銅メダルを捧げる。』

「オリンピック柔道はとてもタフなスポーツですが、特に彼女が銅メダルを獲得するまでの道のりは大変険しいものでした。

幼女だった彼女を柔道へ導いた兄のスティーンが、昨年自ら命を絶ちました。また、同じ70kg級の元世界一で、自分こそがオランダ代表としてオリンピック出場にふさわしいと信じて裁判を起こしたポーリング選手との熾烈な戦いがありました。

そうした背景のもと、彼女は金メダルのみを目指してこの東京オリンピックに出場しました。金メダルはかつて一度もオランダの女子柔道が勝ち取ったことがないものでした。

決勝進出をかけた対戦に負けた後はすべてが終わってしまい、内に籠るような気持ちになりました。ミヒヤエルコーチは、そんな彼女の体中を叩いて警告を与え、励ましました。彼女はこの試合は私自身のためではなく、兄弟のため家族のためにという信念のもとに自分を取り戻し、複雑な思いと重圧を跳ね返して銅メダルを獲得しました。

勝利の直後、彼女は空にいる兄に向かって両手でハートマークを作りました。

試合後に NPO（オランダの NHK に相当するテレビ局）のインタビューに次のように答えています。

「兄もこれを体験したかったと思います。私も彼が此処にいてくれたらどんなに良かったことかと思います。」

オランダはその日、一日で8つのメダルを獲得し歴史的な記録を残しました。1928年、約100年前にアムステルダムで開かれたオリンピックで、一日に7つのメダルを獲得した記録を、その日最後に長い延長戦の末にファンダイク選手が獲得したメダルが破ったのです。」

サンネ選手は、帰国後、オリンピック選手や関係者を招いたテレビ番組に出演しました。番組のホストが次のような質問をサンネ選手にしました。

「他の人と共有できる、昨年学んだことは何ですか？お兄さんとトレーニングパートナーの事を考えていると思いますが（彼女は昨年兄と柔道のトレーニングパートナーの2人を自殺で亡くしています）」

サンネ選手は次のように答えました。

「スポーツは最も重要な事ではないということです。愛や幸せ、価値のあるものはすべて、他の人の中にあるということです。それに気づくには努力が必要でした。彼らを取り戻すことはできないんですからね。」

「愛や幸せ、価値のあるものはすべて、他の人の中にある」

「Together」

サンネ選手が私に伝えた「Together」には、心の痛みと悲しみを伴った深い愛と人生の真実が込められていたのです。

人は一人では生きていけない。社会の中で人と人との間で共に生き、生かされている。

家族、友人、職場で、地域社会で、日本人として、さらには人類の一員として。

共に生きること、それは、生きる源であり、生きる力であり、生きる目標であり、生きる喜びであり、生かされている感謝であり、そして、生きる意味そのものではないでしょうか。

私にとってのオリンピックのレガシーは、サンネ選手が教えてくれた「Together」であり、その実現に向けて生きていくことです。

オリンピック・パラリンピックは閉幕しましたが、私たちの心のなかにその精神はレガシーとなって灯され、燃え続けています。

次に、少し私の若い頃のお話をさせていただきます。

30代の10年間、地域の明るい豊かなまちづくり運動に参加していました。中でも、1991年～97年の間、日本青年会議所で国内外でのボランティア活

動に携わっていました。それは、「LIFE CHANGE EXPERIENCE」(人生を変えるような体験)の連続でした。

1991年、イラクのクウェート侵攻に端を発した湾岸戦争。

日本は、多国籍軍に130億ドル(当時のレートでおよそ1兆8千億円)もの資金を拠出しながら、人的貢献がなかったことから小切手外交と揶揄されました。戦争後に、クウェート政府がアメリカの新聞に出した感謝の広告に日本の名前がなく、「日本外交の敗戦」だといった声も上がりました。

この湾岸戦争を機に、国内では国際貢献のあり方が議論され、多くのNGOも誕生しました。政府は戦争の翌年、自衛隊のPKO・国連平和維持活動への参加を可能にするPKO協力法を成立させました。

日本青年会議所も、国際貢献ができる人材育成のための「グローバル・トレーニング・スクール」の開催や、NGOの国境なき医師団と同様に、現地に飛んでいき国際貢献をする「国境なき奉仕団」を設立しました。

私は、運よくこの2つの組織で活動する機会をいただき、フィリピン、タイ、バングラデシュ、ケニア等で汗をかきました。

当時は、「Earth our home(ふるさと地球)」というテーマのもと貧困、飢餓などから世界の子どもたちを救うための学校や病院の建設、難民支援などを行っていました。

1992年、ブラジルのリオデジャネイロで国連環境開発会議(地球サミット)が開催されました。人類共通の課題である地球環境の保全と、持続可能な開発の実現のための具体的な方策を得ることを目的とした会議でした。国連に加盟しているほぼすべての約180カ国、その他多数の国際機関、NGO代表などが参加し、100カ国余の元首または首相が参加するという史上かつてないほどの大規模な会議でした。

日本青年会議所もNGO代表で参加しました。私も会議には参加していま

んが、セクレタリーとしてリオデジャネイロに行く機会をいただきました。世界の首脳やNGOが一堂に会し、地球の環境問題の解決のために真剣に取り組んでいこうという空気と大きな歴史的なうねりを肌で感じることができました。

「Think Globally Act Locally」

地球は、私たちの大切な故郷という意識のもと、活動していた日々でした。

青年会議所を卒業後は、地域にもどり家業に勤しみ、足元から見つめなおして地域に貢献していこうと人生の転換をはかりました。

昨年11月、「世界農業遺産国際会議2021」が、石川県で開催されオンラインで参加しました。国連食糧農業機関（FAO）など国際機関をはじめ、国内外の認定地域の代表者や政策担当者、研究者などが一堂に会し、これまでの取組・成果を発表しました。

特に本会議では、英国グラスゴーで開催されたCOP26の直後ということもあり、世界農業遺産がSDGs（持続可能な開発目標）の達成、気候変動の緩和、生物多様性の保全など世界的課題の解決に貢献することの確認や提言もなされました。あらためて世界農業遺産に申請中の当地域の「武蔵野の落ち葉堆肥農法」の使命と役割を再認識したところです。

会議の中で、公益財団法人地球環境戦略機関の武内和彦理事長が、スウェーデンの環境学者ヨハン・ロックストロームの「プラネタリー・バウンダリー（地球の限界）」と、農業遺産のSDGsへの貢献について講演されました。

早速、その著書『小さな地球の大きな世界～プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』を読ませていただきました。

～人類の社会経済活動が、産業革命以降加速度的に拡大され、私たちが地球上で安全に生存できる限界を超えようとしている。

人類には、地球の限界の範囲内で、科学技術の発展や持続可能な社会への転換、貧困の緩和と経済成長を追求する新たな発展パラダイムが求められ、行動を起こす時である。

という内容です。SDG s の基盤となった研究報告です。

科学的知見にもとづいたそのメッセージに、1992年の地球サミットを思い出しました。当時12歳のセヴァン・カリス＝スズキさんは、子どもの環境団体の代表として子どもの視点から環境問題についてスピーチしました。世界を5分間沈黙させた少女として世界中で有名になりました。

「私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです50億以上の人間からなる大家族であり、3千万種類以上の生物からなる大家族です。いろいろな国の政府や国境が、どんなに分け隔てをしようとも、私たち地球で生きるものたちが1つの大家族だということは、変えようがありません。

私のお父さんは、いつも、「人間の価値は、何を言ったかではなく、何をしたかで決まる」と言っています。でも、私は、あなたがた大人がこの地球に対してしていることを見て、泣いています。それでも、あなたがた大人はいつも私たち子どもを愛していると言います。本当なのでしょうか？もしそのことばが本当なら、どうか、本当だということを言葉でなく、行動で示してください。」
(セヴァン・カリス＝スズキさんの動画は、Webでもご覧いただけます。)

私には孫が8人います。昨年12月、3歳の孫の誕生日を祝いました。

この子が 50 歳になった時、さらには 80 歳になった時、どんな生活をしているのだろうか。どんな社会になっているのだろうか。自然環境は。その子どもや孫たちはどうだろうか。地球はどうなっているのだろうか。と考えました。

美しく青く輝く地球

地球は、私たちのかけがえのない故郷です。

持続可能な地球における繁栄と幸福、それはすべての人が平等に持つ権利です。一方で、私たちは未来の子どもたちのために美しい地球を守る責任を共有しています。

私たちは、未来の子どもたちに待ち受けているかもしれないプラネタリー・バウンダリーと、その悲劇と痛みを想像しなければなりません。そして、その時が到来しないよう一人ひとりが具体的な行動を起こしていくことが求められています。

私たちの使命は、子どもたちの未来を守ることです

「Think Globally Act Locally」

そして、さらに

「Think Locally Act Globally」

も求められています。

なぜならば、人類の自然や政治、経済などの行為は、すべて密接につながり、未来の子どもたちの命と幸せを左右しているからです。

今日は、訓示というよりは、私自身の今のまちづくりへの思いを伝えさせて
いただきました。

「Together」、そして「Earth our home(ふるさと地球) 」

それぞれの立場で、少しでも念頭に置いていただけたら幸いです。

結びに、これから寒さも一段と厳しくなり、新型コロナウイルス感染症拡大
の懸念もあります。健康管理には、十分ご留意いただき職員とご家族が共に健
康で、充実した一年を過ごされることを心から願ひまして年頭のあいさつとい
たします。